

山形・大楯遺跡

おおだて

- 1 所在地 山形県飽海郡遊佐町大字小原田字大楯・大槻
- 2 調査期間 一九八七年(昭62) 四月～八月
- 3 発掘機関 山形県教育委員会
- 4 調査担当者 伊藤邦弘
- 5 遺跡の種類 城館跡
- 6 遺跡の年代 鎌倉時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

大楯遺跡は、庄内平野の北端、遊佐町大字小原田字大楯・大槻を中心とした水田中に位置する。標高は約一六mを測る。



発掘調査は県営圃場整備事業によるものである。検出された遺構は、掘立柱建物・柵木列(SA10)・井戸・土壇・溝等である。柵木列は一九八六年度の分布調査で検出された箇所を含むと、東西約三〇m、南北約二五mに及び、さらに

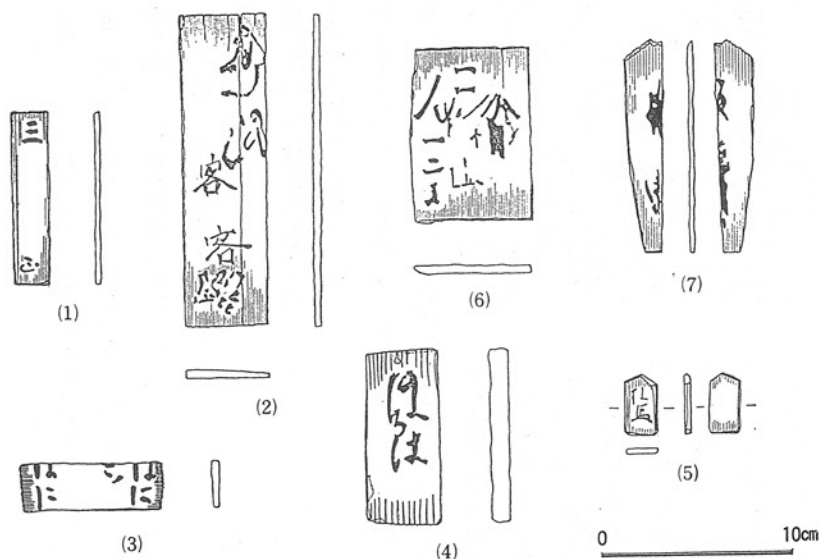
西へ続くものと考えられる。出土した木簡は、溝SD10一から四点、土壇SK2六九から一点、溝SD三八三から一点、柱穴から一点の計七点である。それぞれの遺構からは、中世陶器(珠洲系陶器)や木製品(箸・櫛等)が出土している。

本遺跡の性格としては、安部親任の『筆濃余理』に記述された遊佐殿の居館、あるいは、文治五年(一一八九)源頼朝の藤原泰衡征伐で投降し、本領を安堵された川北冠者忠衡が居館を構えた地域と推定される。

8 木簡の釈文・内容

- (1) 「三」 93×19.5×3 011
- (2) 「客 客」 169×44×3.5 011
- (3) 77×44×3 081
- (4) 「(穿孔) ばろは」 95×39×10 011
- (5) 「桂馬」 34×17.5×3 061

木簡の形態は短冊形が多い。(2)は文字の他に猪・兎と下方に猿と考えられる三匹の動物が横位に描かれ、文字は兎と猿の間に書かれている。絵暦の可能性がある。(4)は「保呂羽」と考え、束ねた矢羽



に付けた付札と思われる。(5)は将棋の駒である。本県で歩以外の駒が出土した初例となる。他の二点は墨痕が残っているが、文字か絵か判然としない。

(伊藤邦弘)

『下野国府跡Ⅶ―木簡・漆紙文書調査報告―』の刊行

下野国府跡の発掘調査は、栃木県教育委員会によって、一九七六年より実施されているが、現在までに五〇〇〇点をこえる木簡の出土をみている。その概要は同教育委員会『下野国府跡Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ等で報告され、本誌にも年毎の紹介がされているがこのたび木簡・漆紙文書についての正報告書が刊行された。

一九八四年三月までに出土した分を対象として、木簡約四二〇〇点余と漆紙文書・墨書土器について、写真図版・釈文および解説を掲載した充実した報告書となっている。

栃木県教育委員会発行 一九八七年三月刊

図版二二二枚、本文A五判 一七九頁、頒価 三五〇〇円

送料七〇〇円

申し込み先 〒320 宇都宮市桜四一―二二

（財）栃木県文化振興事業団